
帝國連合艦隊～史上最大の空母艦隊出撃!!～

0 0 7

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝國連合艦隊～史上最大の空母艦隊出撃！～

【Zコード】

Z80361

【作者名】

007

【あらすじ】

1922年ワシントン軍縮会議。アメリカ合衆国の思惑を受け入れ、結果的に戦艦の保有・建造を自主規制した大日本帝國は、空母を海軍の主力とする。戦艦戦力に見切りを付け、空母戦力に重きを置き量産を行つた大日本帝國と大艦巨砲主義こそが最強と位置付け、46センチ砲搭載戦艦まで建造したアメリカ合衆国。両国は常に相手を意識した軍拡を続けて來た。そして遂に1941年12月8日。大日本帝國・大英帝国は揃つてアメリカ合衆国に宣戦布告を行つた。太平洋のそして、世界の運命を決める大戦争が勃発したのであつた。

プロローグ（前書き）

不定期更新です。

プロローグ

1941年12月8日

大日本帝國はアメリカ・オランダに宣戦を布告した。

イギリスも日英同盟にならい、宣戦布告を行つた。

広島県呉柱島沖

呉は世界三大海軍国の一角を担つ、大日本帝國海軍連合艦隊の母港である。

世界最大の超弩級空母大和級『大和』『武藏』『信濃』、正規空母金剛級『金剛』『榛名』『比叡』『霧島』、正規空母扶桑級『扶桑』『山城』『伊勢』『日向』、正規空母赤城級『赤城』『加賀』『蒼龍』『飛龍』。巡洋艦・駆逐艦も多数停泊、潜水艦は数隻しか停泊しておらず、殆どが出撃している。

連合艦隊司令長官小沢治三郎大將は參謀長の宇垣纏中將から宣戰布告を知らされた。

「『帝國政府ハ対米蘭宣戰布告セリ。連合艦隊司令長官ハ出擊準備ヲ開始セラ。』以上です。」

「山本總理も決意したか。」

小沢長官は一言呟いた。

帝都東京首相官邸

執務室では山本五十六總理が溜め息を吐いていた。

「仕方あるまい。開戦してしまったからには、早期講和を目指すまでだ。」

山本總理は決意を固めた。

大日本帝國はイギリスと手を組み、世界最強のアメリカに立ち向かうのであった。

プロローグ（後書き）

次回は、開戦までの経緯を書きます。

開戦への足音

全ては1890年から始まった。

1890年にドイツ皇帝、ヴィルヘルムが命令し、海軍長官アルフレート・フォン・ティルピッヒが計画した建艦計画が、世界的な建艦競争に火をつけた。この計画は順調に進み、これまでも『大洋艦隊』の別名を冠されていたドイツ海軍は大英帝国と同等或いは、個艦能力で一部大英帝国を凌ぐ戦力を保有したのである。この時期の海軍戦力ランキングは1位大英帝国、2位がドイツと言う順位となっていた。しかも上記のように、戦艦の個艦能力では大英帝国を凌ぐ性能を有していたのである。これに当然ながら、大英帝国・フランス・イタリア・アメリカは対抗意識を燃やした。ドイツ海軍の大洋艦隊を凌駕するべく、此等の国は建艦計画を推し進めた。そして大日本帝國も日露戦争終結から建艦競争に加わった。これに一歩も一歩も進んでいたのが、大英帝国であった。

イギリスは1906年に『ドレッձドノート』を完成させ、世界的な戦艦の常識を打ち破った。このドレッձドノートはアメリカ・フランス・イタリア・大日本帝國に衝撃を与えた。更に建艦競争を加熱させる結果となつた。しかしこの建艦競争は1914年に勃発した、第一次世界大戦で速度が低下した。

第一次世界大戦は大方の予想を裏切り、長期間した。ドイツの降伏で第一次世界大戦が終結したのは、1920年であった。この大戦が世界各国に与えた経済的打撃は大きかつた。大英帝国・イタリア、そして大日本帝國は辛うじて戦勝国に名を連ねたものの、国内産業の不振や失業者に悩まされた。

第一次世界大戦は事実上、アメリカの一人勝ちであった。アメリカは参戦から有り余る経済力を背景に連合国側を勝利に導いた。しあわせはアメリカの世界戦略の一環であった。この世界戦略はアメリカが世界を支配すると言う、狂気に満ちた考え方であつた。この戦略を成功させる為にアメリカは、世界帝國である大英帝国の対策に頭を悩ませた。世界を支配する為には世界帝國大英帝国を制覇しなければならない。そこでアメリカは大英帝国と犬猿の仲である、フランスと手を組む事を決定した。1917年に米仏同盟が締結された。これによりアメリカ資本が戦時中にも関わらず、フランスに続々と進出。フランス政府は自国産業が買収される危機を感じながらもアメリカ資本進出を容認。フランス政府は紙一重の賭けを行つたが、その賭けによりフランス経済は発展していった。

そして1921年1月15日。フランスのパリで連合国だけの講和会議が開催された。これによりヴェルサイユ条約が調印された。ドイツは国土を大部分が連合国で割譲され、植民地も連合国に分配された。軍備も保有が禁止され、『自衛隊』なる組織の保有を認められた。『明らかな侵攻計画が認められる時だけ攻撃を行う。』このように書かれた『ドイツ共和国憲法第9条』を実行するべく組織されたのだ。これによりドイツは、歐州三流の国家に転落した。

1922年1月1日。アメリカ合衆国ウイルソン大統領の提唱が、ヴエルサイユ条約で設立が認められ、スイスのジュネーブで『国際連盟』が設立された。常任理事国は大英帝国・フランス・イタリア・大日本帝國、そしてアメリカ合衆国であつた。

国際連盟の常任理事国となつた五ヶ国であるが、その仲は冷えきつたものであつた。その決定的な出来事となつたのが大日本帝國が第1回常任理事国会議に提出した『人種差別撤廃法』であつた。これに大英帝国・イタリアは賛成したが、アメリカとフランスが強固に

反対した。大日本帝國にとつては白豪主義のオーストラリアを傘下にした大英帝国が賛成するとは思つていなかつた為、ここが攻め時とばかりに賛成派を増やそうとした。常任理事国会議では3対2で可決されたが、非常任理事国も参加する理事国総会ではなんと、3対12で否決された。非常任理事国10ヶ国はアメリカに追従し、反対に回つたのであつた。この事態に大日本帝國・大英帝国・イタリアはアメリカの行動を非難。3ヶ国のマスメディアも非難した。アメリカはそれを無視。日系人排斥を開始し、大英帝国・イタリアの移民も排斥し始めた。

これに大日本帝國・大英帝国・イタリアは軍拡で対抗した。常任理事国5ヶ国は軍拡による対立を深めていったのであつた。しかしその建艦競争は、國家財政を圧迫させた。特に大日本帝國は『ハハ艦隊建造計画』を立案したが、その計画は無謀であつた。建造計画は大英帝国・イタリアも立案したが、大日本帝國と五十歩百歩の計画であつた。そこでアメリカは世界的な軍縮を提案。

1922年4月に、ワシントン軍縮会議を開催した。この会議では戦艦の建造を世界的に制限し、アメリカとフランス優位の世界秩序を築こうとする会議であつた。まず最初にアメリカが提出したのが主力艦（戦艦）の保有量制限案であつた。アメリカ55万トン、大英帝国・フランス40万トン、イタリア15万トン。大日本帝國は戦艦の保有を禁止された。これに当然ながら大日本帝國代表加藤友三郎総理以下、代表団は烈火の如く反対した。当然大英帝国とイタリアも反対（これは大日本帝國が戦艦保有を禁止された事に対する反対であつた）した。海軍力・戦艦こそが国力の象徴であり、戦艦保有禁止は宣戦布告に等しい提案であった。事実、加藤友三郎総理は第1日目終了後の記者会見で、『宣戦布告と受け取れる』と発言した。会議は2週間行われたが、結局は調印されずに終了。会議は

流産するかに思われた。しかしアメリカは調印させたいばかりに、半年後の再開を提案。これに大日本帝國は一応賛成し、大英帝国とイタリアも賛成。会議は半年後の再開となつた。

加藤友三郎総理以下、代表団は帰国早々に帝國議会に会議内容の詳細を伝えた。これに帝國議会は『対米強硬論』『対米宣戦布告』『軍縮条約不参加』を声高々に叫んだ。海軍内部でもアメリカへの強硬論が日増しに増大していった。4ヶ月が経過し、大日本帝國全士で軍縮条約不参加に傾く中、大蔵省はある資料を帝國議会に提出した。それはハハ艦隊建造計画を継続した場合、国家財政が破綻。戦わずして国家が崩壊するという結果が出た。

これにより大日本帝國中が揺れた。特に国民の考えが変化した。『海軍は戦わずして国家を崩壊させるつもりなのか?』『軍が国を守らざして何を守る?』これにより帝國議会も軍縮条約賛成に傾き始めた。この大蔵省の資料提出は、加藤友三郎総理と山本五十六海軍次官の影響が大きい。2人は現在の状況を危惧し、早期健全化を進めていた。そこで大蔵省に資料提出を行わせたのである。海軍内部においても、考えは大きく変化した。『国家・国民を守るのが海軍連合艦隊の役目であり、今までの軍拡は国民の皆様に負担を増大させる要因であった。』とは、当時の連合艦隊司令長官の謝罪である。これにより海軍と帝國議会を纏める事に成功した加藤友三郎総理は、再びワシントンに向かつた。

第2回目の軍縮会議で大日本帝國代表団は、アメリカに対しても空母の無制限保有を要求した。これにアメリカは二つ返事で認めた。これにより大日本帝國は軍縮条約に調印。これに大英帝国とイタリア・

アメリカ・フランスも調印。これにより条約は、即日施行された。この条約調印により加藤友三郎内閣は国民を味方に付け、『海軍主兵路線』『空母主兵主義』を突き進む事になった。

ワシントン軍縮条約により戦艦の保有は禁止されたが、空母の保有をアメリカに無条件で認めさせた。そこで海軍は完成戦艦・建造途中の戦艦を空母に改装する事を決定。『金剛』『比叡』『榛名』『霧島』『扶桑』『山城』『伊勢』『田向』『長門』『陸奥』『赤城』『加賀』を空母に改装した。『天城』『土佐』は関東大震災により破損。これにより練習空母に改装され、発着艦訓練に使われる事になつた。この戦艦改装空母に加え、巡洋艦・駆逐艦・潜水艦の増産を開始。これら補助艦艇の保有は軍縮条約には明記されていなかつた。

しかしこれにアメリカ・フランスが反発。補助艦艇の保有も禁止・制限するべきだと訴えた。これに大英帝国と大日本帝国・イタリアは形だけ賛同し、ロンドン軍縮会議が1933年に開催された。この会議ではロンドン軍縮条約が調印されたが、ワシントン軍縮条約とは違い、大英帝国・大日本帝国・イタリアに優位な内容となつた。重巡洋艦日英伊18万トン・米仏14万トン。軽巡洋艦日英伊20万トン・米仏16万トン。潜水艦日英伊7万トン・米仏5万トン。ワシントン軍縮条約は既に失効し、アメリカはダニエルズプランを再開した。大日本帝國はワシントン軍縮条約失効後も、空母建造に力を入れた。補助艦艇保有数で米仏が少ない理由は、主力艦に力を入れたためであつた。そのため、日英伊の建造が停止される事により、さしたる反対もせずに調印した。

そして1935年。ロンドン軍縮条約失効後から、世界は大きく動き始めた。

欧洲でドイツは、強力なカリスマ的指導者が画家となり、遂には『永世中立国宣言』を行つた。これにより欧洲にドイツ・スイス・オーストリアの『永世中立国連合』が成立した。3ヶ国は永世中立国を固持し、世界の恒久平和を求めた。

ソ連は改革の失敗・共産党内部の派閥争い、そしてスターリンの死亡で内戦に発展。ソ連崩壊により、中国では『中国共産党』が瓦解した。これにより中国は蒋介石率いる『国民党』が中国を統一。『中華民国』の建国を宣言した。これにより大日本帝国は『日中同盟』の締結を提案。中華民国政府も賛同した為、1936年にも日中同盟が締結された。また満州帝国とも中華民国は同盟を結んだ。

残る列強で争つていたのは、大英帝国とフランスであつた。両国は百年戦争から対立していた。特にフランスはアメリカと同盟を結んでおり、大英帝国との対立を鮮明にした。エジプト運河や東南アジア植民地を巡り、対立はより深刻化した。この争いにちよつかいを出したのが、アメリカ合衆国である。フランス同盟を結んでいる事を宣伝。経済・軍事両方で大規模な支援を宣言。これにオランダも追従した。大英帝国はこの対応に激怒。

さらに1940年末には、アメリカ・オランダ両国は『レンドリー・ス法』を議会で可決。ただの軍事支援ではなく、戦車・トラック・航空機・大砲、果ては平甲板型駆逐艦まで売却する法案であつた。そして1941年4月に、遂に北アフリカで大英帝国とフランスは

激突した。

フランスは委任統治国シリア・レバノンから軍を派遣。イラクの大英帝国軍基地を強襲攻撃。レンドリース法で購入した、戦車・トラック・航空機が大量に配備されており、後に『電撃作戦』と言われる戦法を編み出した。その後フランスは、大英帝国に宣戦布告した。これにイギリス首相チャーチルは、激昂した。チャーチルはチエンバレン首相の急死により就任した。チエンバレン首相はアメリカとの対立を鮮明にしており、それによる高血圧が脳梗塞と併発した事が原因と言われている。真相は不明だが。

チャーチル首相は世界帝国のプライドをかけて、立ち上がった。これにイタリアも賛同。両国そろって、フランスに宣戦布告した。これに大日本帝國も大英帝国支援を宣言した。そこでチャーチルは『日英伊三国軍事同盟締結』を提案。これは日英・英伊軍事同盟から発展したものであった。1941年7月1日日英伊三国軍事同盟が東京・ロンドン・ローマの各都市で締結。7月13日に大日本帝國はフランスに宣戦布告。仏印インドシナへの侵攻を開始した。

そして7月15日にはアメリカが大日本帝國に対する制裁として、対日石油輸出停止を発令。この時期から日米関係は更に悪化した。この石油輸出停止を受けて、近衛内閣は総辞職。後任に海軍大臣であつた、山本五十六大将が総理大臣となつた。日米関係が邪険になり、開戦が必死と見られチャーチルは大日本帝國支持を明確にするため、東洋艦隊増強を行つた。世界に冠たる大英帝国はその海軍兵力を北大西洋・南大西洋・地中海・極東に配備していた。その中で北大西洋と南大西洋の『本国艦隊』、地中海の『地中海艦隊』は主力となる戦艦を中心して配備していたが、『東洋艦隊』は巡洋艦と駆逐艦主体の艦隊であった。そこで増強の柱として、最新のキング

ジョージ5世級戦艦プリンスオブウェールズの派遣を決定した。これによりプリンスオブウェールズを旗艦とし、レパルス・インドミタブル等を主力とした東洋艦隊がシンガポールに配備されたのであつた。

大日本帝國も対米交渉を進めるが、状況は改善されずにいた。これにより山本總理は対米交渉中止を決断。断腸の思いで対米開戦を念頭に置いた作戦計画立案を海軍・陸軍に命じた。

そして12月1日。御前會議で対米開戦が決定。12月8日に宣戦布告したのである。

ジャワ海の南遣艦隊

1941年12月10日

マレー半島リンガ諸島沖

イギリス東洋艦隊は、ボルネオ島南部へ進撃していた。

明日の夜半にはボルネオ島北部ブルネイ駐留の、陸軍が主力となり南部に侵攻する予定だ。

大日本帝國海軍南遣艦隊もブルネイ南部の要衝、バリクパパンに上陸作戦を慣行する。

イギリス東洋艦隊旗艦戦艦プリンスオブウェールズ艦橋

「日本機より入電。『貴艦隊ノ到着ヲ歓迎ス。貴艦隊ノ上空直掩ハ任サレタシ。』以上です。」

伝令が電文を読み上げた。

「頼もしいではないか。世界最強の大日本帝國航空機に、直掩をさ

れるんだからな。」

東洋艦隊司令長官トーマス・フライップス中将は、紅茶を飲みながら言った。

「しかし凄いですな。爆撃機で、直掩機の代わりになるとば。」

プリンスオブウェールズ艦長の、リーチ大佐は感心しながら囁いた。

「ああ、そうだな。しかし、これは素晴らしい考えだな。」

「そうなんですか？ 爆撃機ですよ？」

「爆撃機だから良いんだよ。」

「？」

リーチ大佐はキョトンとした。

「良く考えてくれ。上空直掩を担当してくれる、大日本帝國海軍の爆撃機は4発機だ。これはアメリカのB-17よりも、武装・装甲・速度が強力だ。私はこの『一式爆撃機』こそが、『空の要塞』の異名に相応しいと思う。まあ、こんな爆撃機が直掩をするんだ。頼もしい限りだよ。」

「確かにそうですね。」

「ああ、そうだよ。」

フィリップス長官は、再び紅茶を飲んだ。

「しかし日本機は素晴らしいですね。」

「その通り。大日本帝國には航空機で学ぶ事が多い。時代は流れ、戦争も変わる。空母を主力とする、大日本帝國海軍は時代を先行したのかも知れんな。」

「確かにそうかもしませんね。」

「戦艦が海軍の主力なのも、1年か2年くらいかもな。」

フィリップス長官の言葉に、艦橋は騒然とする。

「早くクリタに会いたいもんだ。こんな心遣いをしてくれたんだからな。」

フィリップス長官は、上空を飛ぶ一式爆撃機を見つめた。

1941年12月10日

時刻は0100時。

月明かりがマカッサル海峡を照らし、戦場とは思えない光景を醸し

出して いた。

こんな中を、南遣艦隊はバリクパパンに向かつて進んでいた。

大日本帝國海軍はワシントン軍縮条約により、戦艦の建造・保有が禁止された。

これはアメリカの理不尽な理由であるが、大日本帝國も国家が破綻しかねない計画を立案した時であつたため、これと云つた反対も無しに調印した。

これにより大日本帝國、とりわけ海軍の方針は『大艦巨砲主義』から『航空主兵主義』に転換された。

長門級を筆頭に、金剛級・扶桑級・赤城級は航空母艦に改装された。この戦艦改装空母の後に、建造されたのが大鷹級であり、大和級である。

南遣艦隊には長門級と大鷹級が配備されている。

大日本帝國海軍連合艦隊南遣艦隊第2機動艦隊旗艦正規空母長門艦橋

「偵察機からの連絡は？」

南遣艦隊兼第2機動艦隊司令長官栗田健男中将が、航空參謀に尋ね

た。

「まだあります。」

「そうか。」

「大丈夫ですよ、長官。必ず見つかります。」

長門艦長の渡部満七大佐が、栗田長官に言つた。

「つむ。」

栗田長官はそう答えると、双眼鏡を手に持ち、外を見つめた。

「…………よし……」

航空参謀が、伝令から電文を受け取り喜びの声をあげた。

「長官、朗報です。オランダ艦隊を発見しました。」

「本当か?」

栗田長官が聞いた。

「はい。大まかな位置は、本艦から7時の方向です。詳しくは、偵察機が隨時方向してくれてます。」

「よし。攻撃隊出撃!..陸奥にも、出撃命令だ。」

「「「了解」」」

艦長や参謀達が、勢いよく答えた。

長門飛行甲板

飛行甲板では、攻撃隊の出撃が進められていた。

ストレートデッキとアングルドデッキに設置された、蒸気カタパルト4基をフルに使用して、航空機が射出されていく。

アングルドデッキと蒸気カタパルトは、大日本帝國海軍が発明したものである。

金剛級を空母に改装するとなつた時、問題となつたのは航空機の発進方法だ。

最初に提案されたのは、アングルドデッキだ。

従来のストレートデッキだけでは、発着艦を同時に二つには無理があつた。

そこでアングルドデッキが発明されたのだ。

発明と言つても、左側に飛行甲板を造つただけだが、これが素晴らしい発明であつた事は明らかだ。

しかし、斜め方向に着艦出来ると言つても、発艦するにはストレートデッキの殆んどを滑走するしかない。

そこで事故が発生しかねないとの意見が出たため、カタパルトを装備する事が決められた。

そこで問題が発生した。

従来のカタパルトは火薬を使用したものである、これを空母のカタパルトに使用するのは自殺行為だ。

そこで海軍技術工廠の技術者達は、機関から得られる蒸気に目を付けた。

蒸気ならば攻撃を受けた時の被害も無く、蒸気は機関から得られる。

この2つの発明が、大日本帝國海軍空母を戦後も活躍させる事になるとは、誰一人として気付いていなかつた。

「全機発艦したな？」

「はい。発艦しました。」

航空参謀が、栗田長官の問い合わせに答えた。

「IJの太平洋戦争初の、海戦だ。出撃した攻撃隊に、激励電を打て。」

「了解……」

通信参謀が、通信室に電話を掛けた。

（初戦で勝てなければ、小沢長官はもとより山本總理、陛下に申し訳ない。）

栗田長官はただただ、祈るばかりであった。

ジャワ海の南進艦隊（後編）

次回予告

長門・陸奥から出撃した、攻撃隊はオランダ艦隊への攻撃を開始した。

同時にフィリピンへの攻撃が開始され、日英連合軍の進撃が始まる。その頃、首相官邸には……

艦隊空襲（前書き）

年越し蕷麦…………年越し前蕷麦を食べてる時に、更新していない事を思い出しましたので、30分で書きました。

ターンタ、タンタンターンって書きましたので、何時か修正します。

0145時

ジャワ海

オランダ艦隊は大日本帝國海軍を求めて、ジャワ海を進撃していた。

しかし午前1時頃に、偵察機に発見された。

すぐさま攻撃を開始したが、偵察機は嘲笑うかのように回避を行い、
撃墜は出来なかつた。

これにより空襲を受ける事は確実となり、艦隊は陣形を整えていた。

敵を迎撃つ準備が整つた所で、見張り員の声が響いた。

「敵機来襲！！」

オランダ艦隊旗艦軽巡洋艦、デロイテル艦橋

「全艦砲撃戦用意！！」

司令長官ドールマン少将の命令が下る。

参謀達がそれを復唱し、通信室に命令が行き、そこから艦隊全艦にて伝わる。

「艦長、この空襲を凌げるでしょうか。」

デロイテルの艦長レンディング大佐が尋ねてきた。

「まあ無理だな。」

「……」

「やつ落ち込むな、レンディング君。かつてのゼーガイセンのようには、華々しく戦おうではないか。」

「了解しました。」

レンディング大佐も覚悟を決めたらしく、笑顔を見せた。

「敵機急降下！…」

そこへ見張り員の叫び声が聞こえた。

「攻撃開始！…」

ドールマン少将の命令が下った。

上空4500メートル

「攻撃開始！！」

攻撃隊隊長の大井哲也中佐が、機上電話で命令を下した。

これにより零戦隊も攻撃を開始した。

既に九九艦爆隊と九七艦攻隊が攻撃を開始している。

ビー！…ビー！…

大井中佐機の機上電話が鳴った。

「なんだ？」

『中佐、私です。』

声の主は、早期警戒機の管制官大浦富士子少佐であった。

「どうかしたか？」

『いえ、何もありません。』

「……」

『ただ、気を付けて下さい。』

「任せろ。敵を沈めて帰るだけだ。』

『了解。』

「それじゃ、切るぞ。』

大井中佐は受話器を置いた。

大井中佐機は更に急降下を続ける。

胴体には300キロ爆弾が1個取り付けられていた。

オランダ艦隊旗艦軽巡洋艦デロイテル艦橋

「急降下来ます！！』

「面舵20度、最大速力！！』

見張り員の報告に、レンティング艦長は的確に指示を下す。

「…？魚雷接近…！真正面…！」

「やられたな。」

見張り員の声に、ドールマン長官は小さく呟いた。

「總員衝撃に備えよ…！」

レンティング艦長の言葉に、全員が覚悟を決めた。

ドグワアアアアン…！

爆発音と共に、艦首が吹き飛んだ。

艦首が吹き飛んだ事により、海水がデロイテルに流れ込む。

「速力を20ノットに落とせ…！」

レンティング艦長が命令を下した。

「無理です！！」

航海長が叫んだ。

「何故だ！！」

「速力は10ノットに下げるべきです！！20ノットだと隔壁が破れます！！10ノットでも危険です！！」

「しかしこれ以上速力を落とせば、やられ放題です！！」

航海長の言葉に、砲術長が食らい付いた。

「…………」

レンティング艦長は考え込んだ。

「速力を10ノットに下げる。」

ドールマン長官が決断した。

「…………」

3人はそれに従つた。

上空3000メートル

大井中佐機

爆撃を終え、上空から戦果確認を行っていた。

一大したもんだ

大井中佐は呴いた。

— ! — ! — !

機上電話が鳴った。

「
は
い」

『うつも中佐』

滝沢か。

滝沢直哉大尉である。

「どうした？」

『帰つてもいいですか？』

「それくらい自分で判断しろー！」

『了解！！帰ります！！』

電話はそれで切れた。

「全く、困ったやつだ。」

大井中佐も受話器を置いた。

戦場全景

ジャワ海海戦は、大日本帝國海軍の大勝利であった。

零戦40機・九七艦攻36機・九九艦爆36機の合計112機の空襲に、オランダ艦隊は為す術もなく全滅した。

初戦において、大日本帝國海軍はパーフェクトゲームを成し遂げたのだ。

0230時

フィリピン首都マニラ

アメリカ合衆国の傀儡となつてゐるフィリピンを解放すべく、大日本帝國海軍が攻撃を開始した。

上空には台湾から飛来した一式爆撃機と、第9機動艦隊・第10機動艦隊・第11機動艦隊の艦載機が空襲を行つてゐた。

アメリカ軍も戦闘機を出撃させようとすると、零戦に次々と撃墜されていく。

その隙に、飛行場や基地・軍港に攻撃隊が襲い掛かつた。

この空襲作戦には『絶対に市街地を攻撃するな』と言つて命令が出ていた。

これを攻撃隊は忠実に守つた。

さすがに攻撃した敵機が市街地に墜落したのは仕方ないが。

攻撃隊の爆撃は効果的であり、敵側の被害はつなぎ登りに増えつた。

特に飛行場が集中的に破壊され、戦闘機の殆んどが地上撃破された事が、大日本帝國海軍攻撃隊にとつては戦いやすかつた。

逆にアメリカ軍側は、袋叩きにされた。

爆撃は1時間にわたつて続き、アメリカ軍の基地は全て壊滅した。

空襲作戦が一段落した事により、大日本帝國陸軍部隊が上陸を開始した。

1941年12月11日午前9時首相官邸

執務室には山本五十六総理と、東条英機陸軍大臣がいた。

山本総理は海軍大臣も兼任している為、海軍陸軍のトップ会談となる。

「「IJの度の戦争ですが。」

東条陸軍大臣が切り出した。

「主戦場が太平洋となるのは、明らかです。そうなると陸軍は、東南亞細亞や太平洋の島々に上陸作戦を行うしか、役目はありません。」

「役目を増やせと仰るのですか？」

「いえいえ、我々陸軍は本土と占領地の防衛に最善を尽しますよ。海軍は頑張つて下さい。」

東条陸軍大臣の言葉に、山本總理は笑顔を見せた。

「ありがとうございます。陸軍にも必ず大規模な戦いの舞台が出てくると思います。その時は頼みます。」

「もちろんです。まあそれまでは、防衛が主任務ですからね。輸送の時は、海軍…………海上保安庁でしたね。海上保安庁によろしく言っておいて下さい。」

東条陸軍大臣はそう言つと立ち上がり、手を差し伸べた。

山本總理は慌てて立ち上がった。

「それでは、失礼します。」

「分かりました。」

2人は握手を交わした。

海軍と陸軍は共に手を取り合つて、太平洋戦争に立ち向かう事を確かめ合つた。

海上保安庁も頑張るでしょう。

今年もあと少しです。

来年こそ、良い年である事を祈ります。

それでは良いお年を。

潜望鏡が見た物

1942年1月15日午前9時
ジョンストン島北方250キロ地点

「總員戦闘配置！！」

伊400 28潜水艦の艦内に、艦長の声が響く。

「大した数ね。」

第3潜水戦隊司令官中村美代子大佐はそう呟いた。

「戦艦が20隻以上、巡洋艦と駆逐艦も大量ね。アメリカ様は金持ちですわね。空母は3隻しか見えないけど。」

中村司令官が潜望鏡から離れると、艦長の須藤由紀中佐が潜望鏡を覗いた。

「確かに凄い数ですね。我が国にあれだけの戦艦を量産出来る経済力はありません。」

「だから海軍は戦艦から空母に主力の座を変えたのよ。」

「どういう意味ですか？」須藤艦長は潜望鏡から離れると、中村司令官に尋ねた。

「考えてみなさい。戦艦はその主砲口径が命よ。敵が私達より口径の大きい主砲を装備した戦艦を建造すると、私達はその口径より更に大きい戦艦を建造しないといけないわ。そうすれば敵もまた、私

達より更に大きい主砲を装備した戦艦を建造する。私達はそれより大きい主砲を装備した戦艦を建造する。キリがないわ。」

「確かにそうですね。」

「そうなれば『ハハ艦隊計画』のような、無謀な計画が罷り通るようになるわ。」

「はい。皇國も一度はそれを計画しました。」

「だけど空母ならどう? 敵が重防御の戦艦を建造しても、攻撃機や爆撃機を大量に搭載しているから手数は多いわ。もし打撃力が足りなければ、艦載機を新型に更新すれば良いわ。空母は大和級や長門級・大鷹級なら発展性があるから、戦後20年はそのまま使えると思うわ。」

「確かに便利ですね。」

「そうでしょ? 航空機の開発も一朝一夕に出来る物じゃないけど、量産となれば中小企業数百社が稼げるわ。」

「戦艦建造だけでは無理だった、中小企業も儲けられるわけですね。」

「そういう事。一種の公共事業ね。」

「先見の明があつた、そうなりますね。」

「アメリカ様は戦艦に拘つたツケを、この戦争で払つ事になるわ。艦長! -雷撃用意! -!」

「了解! -!」

須藤艦長は素早く命令を伝える。

「雷撃用意完了! -! -!」

艦内電話を片手に水雷長が須藤艦長に伝えた。

「30秒で雷撃用意完了!」

「全自動装填装置のおかげですね。」

「艦長、準備は良いかしら？」

中村司令官は潜望鏡を覗きながら須藤艦長に聞いた。

「はい。何時でもどうぞ。」

「いぐわよ……」

「……」

「……囮魚雷発射！…」

「1番発射！…」

「1番発射！…」

中村司令官の命令を下し、須藤艦長が復唱して水雷長に伝える。水雷長はそれを艦内電話で魚雷発射管室に伝えた。その後に魚雷発射管から囮魚雷が発射された。

「海龍発射！…」

「海龍発射！…」

中村司令官が腕を振り下ろすと、須藤艦長が復唱した。それを水雷長が魚雷発射管室に伝える。

「急速潜航！…」

「急速潜航！…ベント開け！…」

須藤艦長の命令を航海長が復唱する。伊400 28潜水艦はその体を海中深くに沈めた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊

現在、世界最強海軍・世界最強艦隊・世界最強戦艦の三冠を達成している海軍は世界中でも、アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊だけである。第二次ダニエルズプランを完成させた、アメリカ合衆国海軍は太平洋の霸権を賭けて大日本帝國と激突した。しかし今のところ、大規模な海戦は行われていない。西海岸付近で完熟演習を行つており、太平洋艦隊がオアフ島パールハーバーに進出したのは昨年来1月30日の事であつた。アメリカは気付いていないが、パールハーバーに太平洋艦隊が進出していなかつた為、大日本帝國海軍は真珠湾奇襲を中止せざるを得なかつた。そのおかげかは分からぬが、大日本帝國と大英帝国は予定よりも早く、東南亞細亞地方から米蘭軍を叩きだした。1月5日の事である。大日本帝國海軍連合艦隊と大英帝国東洋艦隊は、現在トラック島に集結しており、決戦の最終準備を終え待機している状態である。

太平洋艦隊第1打撃部隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

「第3打撃部隊旗艦ノースカロライナより入電です。『魚雷接近、

回避行動に移る。』以上です。』

伝令はそれだけ言つと、艦橋を出ていった。

「なるほどね。それが面舵の理由ね。』

第1打撃部隊司令官のコリアマクレーン中将が呟いた。

「しかしあんな丸分かりの魚雷を発射するとは。敵はやはり貧乏所帯ですね。』

ユナイテッドステーツ艦長のエリスノアール大佐が笑いながら言った。

「問題はそこじゃないわ。僅か15キロ先の潜水艦に気付かなかつたソナーが問題なの。もしかすると私達の行動は、連合艦隊に筒抜けかもしれないわ。』

「まさか、偶々ですよ。貧乏海軍ですから、空母しか建造出来ないじゃないですか。アメリカ合衆国海軍に敵は存在しません。』

「……』

ユリア司令官はエリス艦長の言葉を無視して、双眼鏡を構えた。ユリア司令官は嫌な予感がしていた。向かってくる魚雷は僅か1発だ。それも航跡がはつきり見える。もしかして囮なのではないのか？ユリア司令官がそう考えていると、嫌な予感は的中した。突如として巡洋戦艦ワスプの左舷から巨大な水柱が現れた。その高さはワスプの艦橋を超えていた。

「……ひ、被雷！？』

砲術長が驚きの声をあげる。いや、絞りだしたように弱々しい声である。

「何故なの！－魚雷は回避したはずでしょ！－」

エリス艦長が我を忘れて叫んだ。しかしワスプは傾斜を強めていく。すでに15度は行っているだろつ。

「ワスプ艦長、総員退避を命じました。」

伝令が艦橋に飛び込んできた。

「ワスプが。」

エリス艦長は艦長席に座り込んだ。そんな中でも、ワスプは傾斜を大きくしていく。そして遂に。

「ワスプ横転！－！」

航海長の言葉に、艦橋にいた全員が防弾硝子に駆け寄った。竣工から5年も経たずに、ワスプはその体を太平洋に没した。

トランク島夏島泊地

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊旗艦超弩級空母大和艦橋

『長官、第3潜水戦隊伊400 28潜水艦より入電です。「ジョンストン島北方250キロ地点に、太平洋艦隊を発見。海龍を発射し、巡洋戦艦レキシントン級1隻を撃沈。」以上です。』

通信室直通のスピーカーからの連絡に、艦橋は拍手に包まれた。

「幸先が良いわよ。」

第1機動艦隊司令長官中野真知子中将が呟いた。

「では長官。」

超弩級空母大和艦長の飯島奈美大佐が尋ねた。

「決戦は近いわよ！！」

大日本帝國海軍連合艦隊・大英帝国東洋艦隊対アメリカ合衆国海軍
太平洋艦隊の決戦は近い。

潜望鏡が見た物（後書き）

大日本帝國・大英帝国対アメリカ合衆国。

どっちが勝つのやら？

1942年1月20日午前10時

マーシャル諸島クエゼリン島

『かつて』大日本帝國海軍連合艦隊潜水戦隊の前線基地であつたクエゼリン島は、アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊の総攻撃を全方位から受けていた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステンツ艦橋

ドグワアアアアン！！

ユナイテッドステンツの全砲掃射による爆音が艦橋に響き渡る。

『『46センチ砲』の全砲掃射は壯觀ですね。』

艦長のエリスノアール大佐はそれこそ笑顔で言つた。合衆国海軍……否、世界唯一の46センチ砲搭載戦艦の艦長になれたエリス大佐は嬉しい限りだろう。そんなエリス大佐とは対称的に、第1打撃部隊司令官ユリアマクレーン中将は双眼鏡を覗いたままであった。

『海兵隊のヴァンデグリフト少将から礼文が届いています。』

伝令が艦橋に入るなりそう言つた。

「日本軍もこれだけの攻撃に、手も足も出てませんからね。飛行場も壊滅して、航空機さえも出撃出来てませんし。」

「友軍航空隊、上空を通過します！…」

見張り員の報告がスピーカーから聞こえた。

「航空隊も遠慮しなさいよ。戦艦の上空を通過するなんて。」

エリス艦長は不機嫌であった。しかしコリア司令官は違う事を考えていた。

（あの日本軍が航空機を出撃させずに、壊滅するような事はないわ。それに戻つて来た航空隊に被弾した形跡が見られない。対空射撃も無かつた事になるわ。ここは敵の潜水戦隊の前線基地だつたはず。こんな簡単に負けるはずはない！！何かあるわ。）

「艦長、対空警戒を最高レベルへ。通信室、第1航空部隊に偵察機の発進を。」

突然の命令に2人は驚いたが、直ぐに復唱した。

「油断したら駄目よ。」

コリア司令官はそう呟いた。

大日本帝國広島県呉連合艦隊總司令部作戦室

ここには連合艦隊司令長官小澤治三郎大將と參謀長宇垣纏中將を筆頭に、連合艦隊主要參謀・関係者がいた。全員が全員、中央の大海図盤に注目していた。碁盤のよつに四角く分けられ、敵味方を示す駒が置かれていた。

連合艦隊總司令部が陸に上がったのは、1925年である。ワシントン軍縮条約で戦艦の保有・建造が禁止された事により、戦艦を航空母艦へ改裝。この空母を護衛する為の巡洋艦・駆逐艦を建造した事から、連合艦隊總司令部の監督範囲が一層拡大した。これにより空母の連合艦隊總司令部設置が困難となつた。答は簡単。自身も航空機を大量に搭載しそれを監督しなければならないのに、連合艦隊全てを監督するような設備を整えるのは無謀である。このような矛盾を打破すべく出された結論が、連合艦隊總司令部の陸上設置であった。勿論これも海軍内部で白熱した議論が巻き起こつた。かつてワシントン軍縮条約締結時以来の内戦とまで言われた。しかし結果的に連合艦隊總司令部の陸上設置は決定された。ワシントン軍縮条約締結時と違い、改革派が幅を利かせるようになつた事が大きいだらう。

「敵はクエゼリン島の占領を始めたみたいですね。」

宇垣參謀長が指示棒でクエゼリン島を叩きながら言った。そのクエ

ゼリン島周辺には、アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊を示す駒が、合計で4つ置かれていた。

「敵は初期作戦を開始したのだろう。」

「初期作戦ですか？」

「そうだ。敵は西進しつつ、我が国の島を占領していく。そしてそれを阻止すべく進撃してきた連合艦隊を叩き潰し、我が国の海上戦力を無くす。そして悠々と西進を続け東京湾に侵入。戦艦主砲を差し向けて恫喝、我が国を占領しようとするだろう。」

小澤長官はそう断言した。

「となると、マーシャル諸島は全て一時的に占領を許す。その後中部太平洋にて決戦ですな。」

宇垣参謀長がトラック島に置かれた連合艦隊主力の駒を指示棒で指しながら答えた。

「その中部太平洋、トラック島から北東850キロが決戦場となる。」

「遂に日米の雌雄を決する戦いが始まるんですね。」「そうだ。史上類を見ない大海戦となるだろう。しかしこの戦いは太平洋戦争の始まりなんだ。例えこの海戦に勝利しても、アメリカは艦艇の増産が可能だ。負ければ当然ながら、海軍が壊滅してお手上げだ。」

「絶対に負けられませんね。」「絶対にだ。」

小澤長官は指示棒でアメリカ海軍の駒を叩いた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

「敵がないなんて……」

エリス艦長が小さい声で呟いた。

（司令部に突入するも、もぬけの殻。）

ユリア司令官は心の中で同じ事を繰り返し呟いていた。ユリア司令官が呟いていたように、先程ヴァンデグリフト少将からの電文が届いた。クエゼリン島には日本軍は1人もいなかったのだ。艦橋は暫し静肅に包まれた。数時間にわたって無人島を攻撃し続けたのである。

「艦長、とにかく接岸するわよ。通信室、輸送部隊に物資の揚陸を

命令。」

「「了解。」」

ユリア司令官は命令を下すと、黙つて外を見つめた。

伊400 28潜水艦艦内

「どうやらクエゼリンを補給基地にするみたいね。」

第3潜水戦隊司令官中村美代子大佐は、潜望鏡を収納しながら言った。

「敵はこれから更に西進するんですからね？」

艦長の須藤由紀中佐が尋ねた。

「そうね。西進するわね。」

「となると、中部太平洋で決戦ですね。」

「そういう事。その時は、全力を出して戦うわよ。」「勿論です。」

「引き続き、敵の監視を続けるわよ。」

「了解。」

須藤艦長は敬礼をしながら答えた。

日米の決戦は近い。

両国の艦隊（後書き）

次回が、接觸。

次々回が、決戦です。

1942年1月25日午前8時

トライック島北東850キロ海域

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

「電文です。『我、敵艦隊を発見せり。距離は貴艦隊から南西250キロ地点。』以上です。」

伝令がそれだけ伝えると、艦橋を出でいった。

「艦長、進路変更。通信室、第1航空部隊に攻撃隊出撃命令。」

「了解！」

第1打撃部隊司令官ユリアマクレーン中将が命令を下し、艦長のエリスノアール大佐と通信参謀が復唱した。

通信参謀は早速、艦内電話で通信室に命令を伝えていた。

「進路変更、南西2-2-4。」

『了解、進路変更。南西2-2-4。』

エリス大佐の命令が操舵室に伝えられた。

「艦長、砲撃戦は任せましたよ。」

「「安心下さい。私とこのコナイテッドステージが負けるわけがないません。私とコナイテッドステージが負ける時、それは弾切れの時だけです。」

「まあまあ、強気ね。応援してるわよ。」「ありがとうございます。」

コリア中将は笑みを浮かべると、外に目をやつた。

(せいぜい頑張るが良いわ。強気なのも今のつまうよ。)

コリア中将は小さく笑つた。

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊旗艦超弩級空母大和艦橋

「長官、こんなに接近して良いんですか？」

第1機動艦隊参謀長松田直人少将が尋ねた。

「大丈夫よ。敵の主力TBDデバステーターは航続距離1000キロ。SBDドーナトルレスは1200キロ。F2Aバッファローも1

200キロよ。250キロまで接近しないと、敵の司令官は航空部隊を出撃させないでしょ？何せ航空部隊はろくな訓練をしてないのよ？

「それに、私達だけでなく。ロイヤルネイビーもいますからね。彼等も戦いたいでしょうし。」

司令長官中野真知子中将と艦長飯島奈美大佐が、松田参謀長の質問に答えた。松田参謀長は2人の息の合った話し方に、田を白黒さるだけであった。

『艦橋、こちら通信室。敵偵察機の通信を聞きますか？』

「聞かせてちょうだい。」

すかさず飯島艦長が艦内電話を取り、要望を伝えた。

『では。「敵機動艦隊は、IJNGF（大日本帝國海軍連合艦隊）主力と思われる。」これが第一報です。次が接近してからの通信です。これは面白いですよ。「緊急！緊急！IJNGF主力は全力出撃の模様！繰り返す！IJNGFは全力出撃！敵旗艦と思われる空母は約300メートル！繰り返す！コナイテッドステーツより巨大だ！！」相当慌ててますね。』

「そうね。貴女は軍を辞めても、宝塚で活躍できそうね。」

『子供の頃の夢は、タカラジョンヌでしたから。』

「その夢が叶うと良いわね。」

『ありがとうございます。それでは失礼します。』

飯島艦長は受話器を元に戻した。

「確かに宝塚に入れそうね。」

「はい。」

中野長官の言葉に、松田参謀長は頷いた。

「彼女は自分の夢よりも、家庭を優先したみたいですね。宝塚の入学金はまだ高いですからね。」

飯島艦長は悲しそうに咳いた。

「確かに入学金は年間1000円でしたね。それじゃ無理ですよ。」「1000円もするのー?」

中野長官は松田参謀長の言葉に驚いた。何せ帝國では普通の会社員で年収450円である。官吏でも年収580円だ。宝塚には財閥のお嬢様位しか入れないのであった。

「金持ちの道楽ね。」

中野長官は呆れ顔で吐き捨てた。

「確かにそうですね。」

『艦橋！…零警（零式艦上早期警戒機）より緊急電です！…「敵航空部隊通過。戦闘機60機、攻撃機45機、爆撃機45機。推定速度200キロ。1時間以内に接触する恐れあり。」以上です！…』

松田参謀長の声を搔き消すよつて通信室からの報告が入った。

「来たわね。全航空部隊出撃よーー！」

中野長官が勇ましく命令した。

大日本帝國海軍連合艦隊の保有する全ての空母が今回の海戦に参加している。全空母艦載機は合計2830機にもなる。驚くべき数である。2割は偵察機と早期警戒機が占めるとしても、脅威的な数字だ。小国なら大和級1隻で壊滅させる威力を持つていた。しかし大日本帝國は断じて無意味に他国侵攻・占領を行う意思は無い。この兵力は世界最大の強敵アメリカ合衆国と対峙する為に、磨きに磨かれた海鷺なのである。今その海鷺が強敵を打ち碎くべく、母艦から蒸気力タ卧ルトによつて次々と射出されて行くのであつた。

大日本帝國帝都東京皇居図書室

「山本、久し振りだな。良く来た。」

天皇陛下は部屋に入つて来た山本五十六総理に、微笑みながら声をかけた。

「お久し振りでござります。」

「最後に会つたのは、開戦報告の時であつたな。」

天皇陛下は椅子を指差した。山本総理は最敬礼をして、椅子に座つた。

「山本よ。海軍はどこまで進んだ。」

「現在、トラック島沖北東海域に展開しております。ロイヤルネイビーも連合艦隊に続いております。」

「余は今でも日米開戦を悔やんである。誠に残念な話だ。」

「御意。」

「しかしアメリカは何故、日本に戦争を仕掛けて来たのだ。余はそれが分からぬ。中国は蒋介石が統治しており、日本との関係も良好だ。」

「アメリカはそれが気に入らないと思われます。」

「日本が中国と仲良くするのがか?」

「御意。」

「亞細亞民族で団結するのに、アメリカは反対なのか。」

「アメリカは世界を己の支配下に置きたいのです。かつて日本が国連に『人種差別撤廃法』を提出した時も反対しました。」

「それは余も覚えてある。」

「アメリカは有色人種を人間と見ていないのです。世界を支配した暁には、有色人種は奴隸として利用しようと考へてゐるのです。現にアメリカでは未だに黒人奴隸が存在します。」

「なんと。未だに黒人奴隸が存在するのか!?」

「南部でそれは多いです。」

「余はアメリカ大統領にその事も申し出よう。」

天皇陛下がそう言つと、若い侍従が部屋に入つて來た。その侍従は紅茶セットを2人の前に置くと、一礼して立ち去つた。

「山本よ。」

「はつ。」

山本總理はティーカップを置くと、姿勢を正した。

「連合艦隊はもともと、防御型に造られたものだ。日清・日露の頃から変わつてはならん、国防の基本なのだ。それが太平洋まで出撃して、無理ではないのか？」

「確かに日清・日露の頃までは無理だったかもしません。それは戦艦主役の時代だったからです。しかしながら、空母を主役と考えるようになつて、遠くへ打つて出る事が可能になりました。我が海軍連合艦隊の空母は『大和』『武藏』『信濃』『長門』『陸奥』『金剛』『比叡』『榛名』『霧島』『扶桑』『山城』『伊勢』『日向』『赤城』『加賀』『蒼龍』『飛龍』『大鷦』『沖鷦』『神鷦』『隼鷦』『龍鷦』『千鷦』と23隻を数えました。これら正規空母がもし沈められた場合、13万トン級輸送船か15万トン級タンカーを空母に改装します。これら2種類は最初から空母改装を念頭において建造されました。現在輸送船とタンカーは全国の造船所で急ピッチで建造が進められています。」

「そのような大型船を増産出来るのか？」

「鈴木商店が『連続部分建造』を確立しまして、全国の造船所はそれを採用しております。」

「それで大量生産が可能なのか。」

「海上保安庁の護衛艇も大量生産しております。」

「海軍は日本の主力となる軍隊である。お前が常々言つたに『海軍あつての日本、日本あつての海軍』だな。」

「誠にそうでござります。」

「期待しておるだ。」

「はつ。」

山本總理は椅子から立ち上がり、最敬礼を行つた。

接触（後書き）

次回は航空部隊同士の空戦から始まります。

空中戦

太平洋上空5 000メートル

蒼空を海鷺が飛んでいた。その数は実に1567機にも及ぶ。これだけの機数を誇る海軍は世界中を探しても大日本帝國海軍連合艦隊しか無いだろう。しかもその1567機は戦闘機・攻撃機・爆撃機だけで、半数出撃の数である。空母には未だに1567機残つており、偵察機・早期警戒機も残つてゐるのだ。

『全機に伝えます。敵編隊は高度5000メートルで前方90キロ地点にいます。戦闘機60機・攻撃機45機・爆撃機45機です。健闘を祈ります。』

「了解。」

攻撃部隊総隊長百瀬友子中佐はそう答えると、スイッチを切り替えた。切り替えた先は、自らの本当に指揮する戦闘機部隊であった。

「全機、上昇しつつ最大速度で突撃。敵は倍だけど、私達の零戦と敵のF2Aでは性能は段違いだから。けど気を引き締めて頑張るよう。以上。」

『了解！』

部下の返事が受話器から聞こえた。あまりの声の大きさに、百瀬中佐は受話器を耳から離した。

「元気が良いわね。」

百瀬中佐はそう言いながら、受話器を元に戻した。

敵の数は150機。迎え撃つ味方の総数は75機である。大和・武藏・信濃3隻の戦闘機部隊が百瀬中佐の指揮する部隊であった。今回は全航空部隊を指揮する総隊長も兼任していたのであつた。

「見付けたわよ。」

百瀬中佐はさつさつと、受話器を取つた。

「全機急降下！！攻撃開始！！」

そう命令しつつも、機体は急降下を始めていた。部下の機体も慌てて急降下を行つた。

百瀬中佐の作戦は、敵の真上から攻撃するものであった。敵は高度5000メートルで進撃している為、高度6000メートルからの奇襲を零戦部隊は仕掛けたのであつた。隊長機には実験的に機上レーダーが搭載されており、その真価が發揮されたのである。

「隊長！…真上です！…」

「くそったれ…全機上昇！…」

攻撃部隊総隊長であるエンタープライズ戦闘機部隊隊長のベック大尉は口汚く罵りながら命令を下した。

「何てこいつた。イエローモンキーの戦闘機は紙飛行機じゃないのか？」

ベック大尉は機体を上昇させつつ咳いた。彼の乗るF2Aバッファローは無理な上昇に泣いていた。しかし敵は涼しそうな顔をしながら急降下を続けていた。

「ヂヂヂヂヂヂヂヂ…！」

「くつ…」

ベック大尉は攻撃せずに、敵を攻撃を避けるのが精一杯であった。

「早い…！」

第一印象は速度の違いであった。急降下の相対速度は別にしても、敵は600キロは出している。対するこちらは420キロが最大だ。速度が違い過ぎる。

「化け物かよ……なに…？」

ベック大尉が振り向くと、味方が半数に減っていた。

「柔なもんね。」

百瀬中佐は機体を引き上げながら呟いた。

「13ミリ機銃で落ちたじゃない。」

背後では複数の敵機が爆発していた。

百瀬中佐は次の敵機に狙いを定めた。敵機は追撃を逃れようと速度を上げながら、右に大きく旋回した。

「甘いわよ。」

百瀬中佐は速度を上げて敵機の真後ろに付いた。

ドグドグドグ…！

ドグワアアアアアン…！

13ミリ機銃の1掃射だけで、F2Aバッファローは爆発した。

「次…！」

百瀬中佐は気を引き締めて、次の敵機へと向かった。

グバアアアアアン！！

「くそつたれ！！」

ベック大尉は叫んだ。敵の攻撃を受けて、右翼が吹き飛んだのだ。F2Aバッファローは揚力を失い、海面に一直線に落ちていった。

「悪夢だ。悪夢だ。悪夢だ。」

ベック大尉は『悪夢だ』と呟き続けながら最期の時を迎えたのであった。

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊旗艦超弩空母大和艦橋

『零警より報告です。『零戦部隊は敵航空部隊を壊滅させり。脅威は排除された。敵艦隊に対する総攻撃を仕掛けんとす。』以上です。』

通信室直通スピーカーからの報告に、艦橋にいた幹部達は拍手していた。初戦において敵航空部隊を全滅させたのは、大きな戦果だろう。しかし問題は敵艦隊への攻撃であった。

「長官。 いよいよ敵艦隊への攻撃ですが、 戦艦を沈められるのでしょつか？」

松田参謀長が中野司令長官に尋ねた。

「沈められるわよ。 急降下爆撃で対空火器を破壊して、 攻撃機の雷撃で止めをさす。 戦艦を沈める為に訓練に励んできたのよ？『用用火水木金金』の賜物を見せれる機会よ。」

「大日本帝國海軍連合艦隊とアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊の決戦です。 雌雄を決する重大な戦いの時に、 参謀長が弱気でどうするのですか！！！ 兵達の士気に関わります！！！」

飯島艦長が怒鳴った。 艦橋は水を打つたように静まり返った。 その静肅を打ち破つたのは、 中野司令長官であった。

「今ここで争つても仕方ないわ。 あの子達の活躍を祈りましょう。」

「分かりました。」

「すいませんでした。」

2人は頭を下げた。

こんな状況であるが、 航空部隊は刻一刻と敵に向かっているのでしつた。

空中戦（後書き）

次回、太平洋艦隊への空襲です。

急降下爆撃（前書き）

お久しう振りで「jacket」です。充電期間を経て、更新を再開致します。
第七独立機動艦隊も順番に更新しますので、宜しくお願いします。

急降下爆撃

午前8時30分

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第1打撃部隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

『味方部隊、敵部隊と激突しました。』

防空指揮所からの報告が、艦橋に響いた。

『味方部隊の壊滅から30分。早いわね。』

ユリア司令官は、双眼鏡を覗きながら呟いた。

「それだけイージーの航空機は高性能だと言つ事ですな。」

「成金国家が無理してるだけですよ。」

エリス艦長はバカにした口調で呟いた。

「そう言ひますが、イージーは世界三大海軍国の一角を占めますよ?」

「だから?」

「あまり見下さない方が宜しいかと。」

「このユナイテッドステーツがあの紙飛行機に沈められるとでも?」
エリス艦長はますますバカにした口調で反論した。航海長は仏頂面で睨み付けていた。

「いい加減にしなさい！！敵は現実に向かってくるの！！言い争つてゐる暇は無いのよー！」

コリア司令官の怒声に、艦橋スタッフ達は震え上がった。

「味方部隊全滅！！敵、全速で向かって来ます！！」

見張り員の声がスピーカーを通じて、艦橋に響いた。

「対空戦闘用意！！」

気分を入れ替えたエリス艦長が命令を下した。

上空5000メートル

「全機急降下！！」

爆撃部隊隊長久保田菜穂子中佐の命令で、爆撃部隊は急降下を開始した。

久保田中佐の九九式艦上爆撃機は、猛スピードで急降下を続けてい

る。その腹部に、徹甲爆弾を抱えて……

超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

「急降下！！」

ドガアアアーン！！

見張り員からの報告が届いた刹那、徹甲爆弾が艦橋トップに命中した。

ドガアアアーン！！

ドゴオオオーン！！

グバアアアン！！

敵の急降下爆撃の命中率は凄まじく、ユナイテッドステーツの機銃・機関砲更には両用砲まで吹き飛ばした。ユナイテッドステーツのみならず、第3打撃部隊と第5打撃部隊・第1航空部隊も急降下爆撃を受けていた。

「なんて奴ら。」

急降下爆撃の命中率の高さに、エリス艦長は呆れ顔で呟いた。

「被害報告！」

ヨリア司令官の命令に、航海長が艦内電話に飛び付いた。

「被害は？……そう……分かつた。報告します。」

航海長は受話器を戻すと、咳いた。

「右舷、両用砲・機関砲・機銃全滅です。左舷、両用砲は半数壊滅、機関砲6基壊滅、機銃全滅です。」

ユナイテッドステーツはこれだけの被害で済んだが、他の艦は酷いものであつた。特に空母ハンタープライズ級3艦は、悲惨の一言であつた。

■ ■ ■ ■ ■

ドグワアアアーン！！

「エンタープライズ、ホーネット、ヨークタウン轟沈！！」

空母こそ海軍の主力と位置付けた大日本帝國海軍にとってエンタープライズ級の撃沈は、最優先目標であった。その為3艦には、多数の九九式艦上爆撃が振り当てられていた。

「攻撃機来ます！！」

急降下爆撃が終わり、爆撃機と入れ代わりに攻撃機が向かって来た。急降下爆撃で対空火器を破壊して、雷撃で止めをさす。見事な分担作業である。しかも急降下爆撃だけで、空母が沈没した事の衝撃が大きい。

「命懸けでこの攻撃を乗り切るわよ！！」

エリス艦長の鼓舞虚しく、艦橋スタッフの士気は日に見えて落ちていた。

急降下爆撃（後書き）

攻撃を1話で纏めようと思つたが長くなりそうでしたので、急降下爆撃と雷撃に分けました。
その為急降下爆撃は短くなりましたが、ご了承ください。

九七式艦上攻撃機の攻撃が始まった。

「片平！ 行くぞ！ ！」

「了解！ ！」

後部座席からの声が、無線を通じて聞こえた。清水純中佐は既に配下部隊に攻撃命令を下しており、全機が雷撃態勢に入っている。清水中佐機は攻撃部隊の一一番槍を努めるべく、海面ストレスを飛行していた。

「まだだぞ、まだ……」

「隊長！ ！」

「……撃え～～～！」

清水中佐の命令を受け、片平主水少佐は魚雷発射スイッチを押した。それにより魚雷は機体を離れ、敵艦に向かって疾走を始めた。

「取り舵いっぷ～い～～！」

超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

エリス艦長が声を絞り上げた。

満載排水量83000トン・全長290メートルの巨艦が、ゆっくりと回る。

「2本回避！－！」

「残り。」

コリア司令官が尋ねた。

「4本です。回避は苦しそうです。」

エリス艦長が額に汗を浮かべながら答えた。意外に自信有りげなのは、コナイトツドステーションこそが世界最大で最強だと信じているからだ。確かにコナイトツドステーションは魚雷の4本ぐらいで、即沈没と言つ事態には陥らないはずだ。

「来るわよー！何かに掘まつてー！」

エリス艦長が叫んだ。コリア司令官も窓際のパイプを握り締めた。

ドグワアアアアアン！－！

83000トンの排水量を誇るコナイトツドステーションだが、右舷に4本の水柱が立ち上った。

ガタンッ！－！

新入りの参謀が、振動でバランスを崩して倒れた。そこに第2撃がユナイテッドステーツに訪れた。

ドガアアアアアアン！！

更なる衝撃がユナイテッドステーツを襲い掛かった。

「艦長、被害は？」

揺れが弱まるのを確認して、コリア司令官が叫んだ。

「お待ちください。」

「艦長！！左舷から魚雷です！！」

「何本！？」

「3本です！！艦攻の数が多いですから、まだ増えるかもしれません！！」

「分かつたわ！！」

エリス艦長が左舷の海原を睨んだ。

「来ます！！」

「面舵いっぱい！！」

エリス艦長の命令でユナイテッドステーツは、大きく回りはじめた。しかしユナイテッドステーツは、2本の魚雷の餌食となつたのである。しかも2本共が、艦尾を直撃した。

「舵は？」

エリス艦長が焦つたように聞いた。

「少し反応が鈍いですが、致命的ではなさそうですが……」

操舵手の答えに、艦橋スタッフ全員が胸を撫で下ろした。舵を失えば全長290メートルのユナイテッドステーツは、ただの標的艦になってしまう。コリア司令官は航空機の恐ろしさをこれまで以上に痛感した。

（世界最大最強のユナイテッドステーツがちっぽけな航空機に翻弄されている……。想像はしてたけど、これ程までに一方的とはね。エノン恐るべしね。）

そこへ。

「あつ！？艦長！…舵が利きません！…」

操舵手が絶望的な声を上げた。エリス艦長は呆然と、艦長席に座り込んだ。これでユナイテッドステーツは、直進しか出来なくなつた。魚雷が直撃した影響で、舵が吹き飛んだのかもしれない。しかも速力が落ちていつていいる為、スクリューもやられたかもしれない。とにかくユナイテッドステーツは、数分もしないうちに『海に浮かぶ要塞』となる。ユリア司令官は、一つの決断を下した。

「通信長、マイクを。」

通信長はユリア司令官にマイクを渡した。マイクは艦内訓示用の、特別装備である。

「艦内総員に伝える。本艦は完全に進撃能力を喪失したわ。舵も破壊され、スクリューも破壊された可能性が高い。これにより本艦ユナイテッドステーツは機関を完全停止させ、進撃してくるであろう

エーヴをアウトレンジ砲撃するわ。これは帰還する事を捨てる、捨て身の戦いとなるわ。もし退艦したい者がいるなら許可するわ。けど出来れば合衆国軍人として、最後まで戦つてほしい。その判断は皆に任せせるわ。』

ユリア司令官はやうやくマイクを置いた。

艦橋スタッフは覚悟を決めた清々しい表情を見せていた。

「司令官、私はお供致します。』

エリス艦長がユリア司令官に敬礼をしながら答えた。

「自分も司令官にお供致します。
「自分も。」
「私もです。」

他の艦橋スタッフも次々と進言した。

『第1砲塔お供致します。』
『第2砲塔、どこまでも司令官に付いてこりますよーー。』
『機関室もお供致します。』
『医務室、覚悟は出来ています。』

各部署からも、次々と賛同の声が届いた。

「みんな、ありがとうございます。本当にありがとうございます。』

ユリア司令官の目に涙が浮かんでいた。

「最後の戦い、頑張りましょう。」

「勿論よ。」

ユリア司令官とエリス艦長は、しっかりと握手を交わした。死を覚悟した人間の顔程、清々しいものはない。ユナイテッドステーツは『海に浮かぶ要塞』として、最後のご奉公に挑むのであった。

雷撃（後書き）

次回は……

第一次攻撃と砲撃戦となります。

全速前進！！

午前8時55分

トライック島北東800キロ海域

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦コナインテッドステー
ツは現在、負傷艦を従えて停泊していた。

コナインテッドステーク艦橋

「敵偵察機、接近します！！」

見張り員からの報告が、艦橋に飛び込んだ。

「遂に来たわね。」

エリス艦長が呟いた。

「艦長、進撃出来る？」

「最大で11ノットしか出ません。」

「それで良いわ。エリスはレーダー装備が充実してるからね。さす
がに停止しては標的艦よ。」

「それでは。」

「艦長！！最大速力、前進！！」

コリア司令官の命令で第1打撃部隊は進撃を始めた。

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊旗艦超弩級空母大和艦橋

『九八艦偵（九八式艦上偵察機）より入電です。【1-15キロ先、敵艦隊進撃中。なお全艦小・中破の艦艇のみです。】以上です。』

通信室からの連絡が艦橋に響き渡つた。

「艦長、どう思つ?」

第1機動艦長司令長官中野真知子中将が飯島奈美大佐に尋ねた。

「敵は残存艦部隊を逃がす為に、自らで私達の足止めを狙つているようです。ここはその敵の考えを逆手に取り、航空部隊を残存艦部隊に差し向ければ宜しいかと。」

「……」

中野長官は腕を組むと、考え込んだ。

「航空部隊は進撃中の負傷艦部隊に差し向けるわ。手負いの部隊が自ら向かってくるんだから、攻撃して沈めれば良いわ。何隻が拿捕出来れば更に良いんだけどね。」

「確かにそうですね。」

「結果が出ました。」

2人が話していると、参謀長の松田直人少将が艦橋に入つて來た。

「凄い戦果ですよ！！」

「早く言つて頂戴。」

「了解！！」

松田参謀長は深呼吸すると戦果報告を始めた。

「戦艦・モンタナ級2隻、アイオワ級2隻、ノースカロライナ級1隻。重巡・ボルチモア級3隻。軽巡・クリーブランド級6隻、ファラゴ級3隻。駆逐艦・フレッチャー級20隻、アレン級14隻。面白い事に、浮上していた潜水艦S級1隻も含めて、52隻撃沈しました。」

「おお～～～！」

艦橋は拍手に包まれた。遂に航空部隊だけで、海の女王戦艦を撃沈したのだ。

「あまりにも数が多く過ぎて、撤退中の部隊は全て被害無しです。進撃中の部隊は手負いの艦艇ですが。」

「それは分かつてゐるわ。」

中野長官は飯島艦長に顔を向けた。

「艦長、第一次攻撃部隊出撃。ただし出撃するのは艦爆隊のみ。」

「艦爆隊のみですか？」

「ええ。艦爆隊で打撃を引えて、砲撃戦で止めを刺すのよ。」

「本気ですか！？」

飯島艦長が驚きの声をあげた。他の艦橋要員も同じ心境だろう。

「本気よ。それに航空攻撃だけで終わったら、あの子達と彼等の出番が無いじゃない。」

中野長官はそう言つと、海原を見つめた。

「重巡洋艦翔鶴級とロイヤルネイビーのね。艦長、早く出撃命令を出しなさい！！通信長、艦隊全艦及び東洋艦隊に命令！！」「最大速力で敵艦隊に進撃せよ」。以上！！」

「「解！！」「

大英帝国東洋艦隊旗艦戦艦プリンスオブウェールズ艦橋

「長官、中野提督から命令です。」

リーチ艦長が受話器を置きながら言つた。

「何だね？」

「『前進で敵艦隊に進撃せよ。止めは貴艦隊の艦砲で行う。』以上です。」

「中野提督は我々にも、花を持たせてくれるのだな。流石は日本人。『思いやり』の精神だな。」

フィリップス長官はそう言つと、紅茶を飲んだ。

「報告によると、進撃中の敵艦隊はユナイテッドステーツを含むと言つております。」

「ユナイテッドステーツーーー？」

リーチ艦長の言葉に、フィリップス長官は紅茶を吹き出しそうになつた。

「ユナイテッドステーツは46センチ砲搭載艦だろう。大丈夫なんか！」

「大丈夫です。2基破壊されており、前後1基となつています。」

「それなら大丈夫だな。」

フィリップス長官は溜め息を吐いた。

「それにあの重巡洋艦も強そうですし。」

「確かにそうだな。」

「砲撃戦が楽しみです。」

リーチ艦長は嬉しそうに笑つた。

日英艦隊は全速力で進撃を始めた。

太平洋で一大砲撃戦が始まろうとしていた。

全速前進ーー（後書き）

結局、延びました。

次回こそ第一次攻撃と砲撃戦です。

最後通牒（前書き）

結局更新します。

勉強ばかりだと、頭が痛くなりますから。

最後通牒

午前9時15分

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊旗艦超弩級空母大和艦橋

「全機出撃！！」

艦橋に中野長官の声が響き渡つた。航空參謀が復唱し、艦橋下の離発着指揮所に命令を下した。これにより指揮権は離発着指揮所に移つた。通信室へ命令が伝わり、全空母も航空機を出撃させ始めた。

「長官、上手くいくでしょうか？」

離発着指揮所に指揮権が移つた事で、飯島艦長が声を掛けってきた。

「大丈夫よ。艦爆隊が敵艦隊の測距儀を破壊して、運が良ければ電気回路を断絶出来るでしょう。」

「敵は全艦沈めるんですか？」

「出来れば、拿捕したいわね。」

「拿捕ですか！？」

飯島艦長が驚きの声をあげた。

「そうよ。コナイテッドステーションをね。」

「戦艦を拿捕するんですか！？」

「ええ。出来るなら、の話だけどね。」

中野長官はさう言つと笑つた。

午前9時45分

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステー
ツ艦橋

連合艦隊から僅か30分の距離に太平洋艦隊は位置していた。ユナ
イテッドステーツは浸水増大で、右舷注水区画が限界水量に達した。
もはや速度は8ノットが限界である。

「艦長、敵はまだ見付からないの？」

ユリア司令官は双眼鏡で海原を見つめたまま、エリス艦長に質問し
た。

「現在、見張り員が総出で索敵しております。」

「レーダーも大破、カタパルト・水上偵察機も大破。もう笑うしか
ないわね。」

ユリア司令官はそう言つと笑いだした。エリス艦長を含め、艦橋ス
タッフは唖然とした。

「もう負けよ、降伏した方が良いのよ。」

「司令官……」

『敵機来襲！！』

エリス艦長が何か言おうとした時、艦橋に見張り員の報告が響き渡つた。

「対空戦闘開始！！」

コリア司令官の命令が下つた。

『IJの大日本帝國とアメリカ合衆国の太平洋に於ける激突は、開戦一発目の戦いにしては規模が余りにも大きかった。何せ大日本帝國海軍連合艦隊はその全力を、アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊も全力をそれぞれ出し切つたのである。両国は大いなる戦果を確信して激突した。特にアメリカ合衆国海軍は「勝利は我が手に有り」と、最早勝つたつもりであつた。当然であろう。46センチと言う巨砲を3連装4基12門も装備した超弩級戦艦ユナイテッドステーツを旗艦とし、まさに「大艦巨砲主義」の申し子と言うべき規模を誇つていた。確かに過去の常識から考えれば12隻もの戦艦に、執拗に殴られれば生き残れる艦隊は地球上に存在しないだろう。第1打撃部隊司令官のコリア中将も戦後に語つている。

「海戦前から私はIJNの空母運用について確かに研究していました。しかしここまで一方的に攻撃を受けるとは思つていなかつたわ。だつてこの時、空母を海軍の中心として考えていたのはIJNだけでしょ？今じや原子力空母まで保有しちやつたしね。」

かつての栄光ある「アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊」は、このトラック島沖海戦で事実上壊滅した。アメリカ合衆国はこの海戦後に船体まで完成していた、エセックス級巡洋戦艦の空母改造工事に着手した。大型タンカーまで空母へ改造し、航空機の生産も開始した。「世界一の工業国」としての意地を見せたわけである。しかし空母艦隊は一朝一夕に整備出来る物ではない。パイロットが特に問題であつた。アメリカ合衆国海軍では飛行機乗りは一番不人気だつたらである。そこを強化するには余りにも遅すぎた。大日本帝國はワシントン軍縮条約で戦艦保有が禁止された時から、空母艦隊の強化に力を入れていた為、パイロット養成の点でも進んでいた。それに加え大日本帝國は技術力でアメリカ合衆国を凌駕する必要があつた。その成果が、「蒸気カタパルト」であり「アングルドデッキ」「対空レーダー・対艦レーダー・射撃レーダー」であつた。空母を海軍の主力と位置付けた大日本帝國にとって、「航空機の早期射出」「効率的な同時離着艦」「敵機・敵艦の早期発見」「敵機・敵艦の早期撃破」が至上命題となり、その結果として新発明されたのが上記の兵器であつた。それではこれまでの説明を踏まえて、今回の海戦を時系列で再検証してみよう。』

小森菜子著

『皇國の聖戦回顧録』より抜粋

午前10時

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステー
ツ艦橋

僅か15分だけの空襲であつたが、最早艦隊の様相は呈していなかつた。此処まで着いてきていた駆逐艦も艦爆隊の爆撃には耐え切れず、終には爆沈してしまつた。残る負傷残存艦隊の布陣は、旗艦の超弩級戦艦ユナイテッドステーツ、これを筆頭に超弩級戦艦モンタナ級メイン、弩級戦艦ノースカロライナ級ノースカロライナ、重巡洋艦ボルチモア級コロンバス・マイコン、軽巡洋艦クリーブランド級トリニティ、軽巡洋艦ファーゴ級マンチエスター・ダルースである。ユナイテッドステーツは大破であるがそれ以外は小破・中破である為、砲撃戦にもつれ込めば勝利出来ると中野司令長官は考えたのだ。何せ大日本帝國海軍連合艦隊の総力をあげての出撃ある。必殺の酸素魚雷を撃ち込む敵は大きければ大きい程、殺りがいが有る。

「どうぞ、司令官。」

ユリア司令官は伝令から通信筒を受け取つた。

「敵の実力は侮れませんね。あの混戦で見張り所に通信筒を投下するとは。」「そうね。」

エリス艦長の言葉にユリア司令官は頷くと、通信筒から電文用紙を引っ張りだした。そこには筆記体で当然ながら英文が書かれていた。

『アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊司令官様へ。

この度は日米開戦と言う事態にお会いする事になり、誠に悲しい次第です。貴国は我が祖國大日本帝國にどのような恨みがあるのでしょか？国際連盟の人種差別撤廃条約の反対、ワシントン軍縮条約での戦艦保有禁止。その頃私は大佐で戦艦扶桑の艦長でした。人種差別撤廃条約の反対・否決に落胆しましたが、ワシントン軍縮条約での戦艦保有禁止には落胆よりも呆れました。国力を表すのは、海軍力であり戦艦力です。それを真っ向から否定してきたのです。戦艦艦長として、貴国に不信感を抱いたのもその時です。部下の中には「単艦貴國のパールハーバーに殴り込みを仕掛けるべきだ」と言う輩もいました。しかし大日本帝國政府は最終的に大蔵省に、財政報告書を公開させて世論操作を行いました。最終的には貴國の条約を受け入れ、世界初となる「自発的戦艦保有禁止」を表明したのです。確かに私も戦艦艦長でしたが、「八八艦隊計画」による財政危機は軍令部に訴えていました。それが結果的に回避されたのがせめてもの救いです。此ればかりは貴国に感謝の意を表したいと思います。介入せずに「八八艦隊計画」を始動させていれば、勝手に国家破綻していくのにわざわざ助けていただいたのですから。何て事は有りません。貴国は結局、人種差別はしていなかつたのです。それからは語るまでも有りませんが、貴国は何を勘違いしたのか大日本帝國を仮想敵国として軍拡を続けました。そして貴国の同盟国であるフランスが大日本帝國の同盟国である大英帝国に、宣戦布告無しに侵攻を開始したのです。此れには我が国としても見逃す訳にはいきません。フランスに宣戦布告をし、南部仏印へ制裁を加えました。そして大日本帝國・大英帝国・イタリアの「三国軍事同盟」が締結されました。しかし貴国は我が国を追い詰めるかのように、石油輸

出禁止を表明したのです。確かに滿州帝國や中華民国等から石油は輸入していますが、5割は貴国から輸入していました。しかし何故、石油を輸出しないのでしょうか？貴国石油会社の殆どが我が國へ輸出していました。その石油会社を潰す勢いで石油輸出禁止を表明したのです。何故か？答えは単純。石油会社はその組織票をルーズベルト大統領の民主党では無く、共和党に入れているからです。貴国大統領の民主党への組織票は、金融企業や不動産企業が中心であり、政治家としての野心も見え隠れしています。そのようなルーズベルト大統領の政治的野心も有り、我が大日本帝國の経済は徐々に追い詰められていきました。その為、山本總理は断腸の思いで対米交渉の停止を決定。貴国との戦争に突入したのです。我が祖國大日本帝國は、貴国との戦争を望んでいません。今回のトラック島沖海戦も断腸の思いで、私は攻撃命令を下しました。しかし貴方達は撤退する事無く、未だに進撃中の事。先程の空襲は最終警告です。これ以上進撃を続けるのなら、残念ながら攻撃するしか有りません。もし、撤退するのでしたら私達は追いません。降伏するのでしたらジュネーブ条約に乗つ取り、丁重に扱います。是非ともお考え下さい。では、次に会うときはお互い笑顔で会える事を祈つて、ペンを置きましたいと思います。

大日本帝國海軍連合艦隊第1機動艦隊司令長官中野真知子中将
P.S. これはGHQ（連合艦隊總司令部）にも複写したのを送っています。』

ユリア司令官は電文用紙を読み終えると、エリス艦長に渡した。エリス艦長は素早く読むと、ユリア司令官に顔を向けた。

「司令官、どう思ひますか？」

「書いている事は全て合つてると想ひわ。特に石油輸出禁止はね。」

「やつぱりそう思ひますか。」

「そうね。」

「どうします、降伏しますか？」

エリス艦長の言葉にて、コリア司令官は腕を組んだ。

「私は降伏したいけど、貴女は戦いたいでしょ？」

「！？……うえ、私はどちらでも。」

「良いのよ。貴女が戦いたいなら戦えば。」

「分かりました。」

「けど、約束して。負けると分かれば降伏するつて。」

「イエスマム！？」

エリス艦長はコリア司令官に最敬礼した。

負傷残存艦隊は最後の意地を見せる為に、砲撃戦に挑むのであつた。

砲撃戦開始（前書き）

いやほや、長い間再びお待たせしまして申し訳ありません。

砲撃戦開始

午前10時35分

トラック島北東785キロ地点

遂に日米両艦隊が砲撃戦を開始した。砲撃は矢張り、アメリカ海軍のユナイテッドステーツから始まった。

大日本帝國海軍連合艦隊砲撃部隊旗艦重巡洋艦翔鶴艦橋

『敵弾、本艦前方に着弾！！水柱の大きさから予測通り、敵戦艦は46センチ砲を搭載している模様！！されど、命中率は極端に低下しているものと思われます！…』

艦橋トップの見張り員の報告が、艦内スピーカーを通して艦橋に響き渡った。それを聞いた艦長の野田美咲中佐は、一言呟いた。

「……大艦巨砲主義の終焉。」

「確かに今回の海戦は大艦巨砲主義の終焉を連想させる戦いでした。空母艦載機による攻撃は、一方的で戦艦を撃沈する事に成功しました。艦長の言われる通りです。」

砲術長の倉持愛佳少佐が通訳の如く、野田艦長の一言を説明した。この2人幼なじみである。小さい頃から野田艦長は一言しか喋らなかつた為、倉持砲術長が説明していた。それは海軍兵学校・海軍大학교でも続き、卒業後の配置先は必ず2人1組で行われるようになつた。倉持砲術長は野田艦長に思いを寄せており、何時かそれを伝

えよつと考えてゐる。

「……全艦全速前進。」

「航海長、機関全速。最大速力で突撃します。通信長、空母部隊の大和に連絡。『砲撃部隊は全速で突撃を開始し、敵部隊を無力化せんとす。』以上を連絡して下さい。」

「「」解。」「

航海長と通信長は倉持砲術長からの『命令』を受けると、行動を開始した。この光景は他艦では絶対に見れない光景だ。何せ同格の砲術長が航海長と通信長に命令するのである。最初の内は反発もあつたが、今では当然の事と受け取られている。何せ野田艦長は双眼鏡を手に仁王立ちして、海原を睨み付けていた。倉持砲術長は命令を下し終えると、艦内電話の受話器を手に取った。

「主砲塔と魚雷発射管、攻撃準備は出来てる?」

「攻撃準備完了! ! !」

全箇所から一斉に声が聞こえた為、倉持砲術長は顔をしかめた。

「攻撃命令を下すまで、各部所は待機。」

「了解! ! !」

倉持砲術長は慌てて受話器を置いた。

「声が大きい。」

そつ然と、野田艦長の隣に立つた。

「……面舵、雷撃。」

「…？航海長、面舵…！…通信長、全艦に面舵命令…。」

「「了解！」」

倉持砲術長は突然の命令に、慌てて命令を下した。その命令を下すと共に、自らも受話器に飛び付いた。

「面舵と共に、魚雷発射…！」

砲撃部隊は慌ただしく攻撃を開始しようとしていた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊残存艦部隊旗艦超弩級戦艦ユナイテッドステーツ艦橋

「命中しませんね。」

「さっぱりね。」

ユリア司令官とエリス艦長は呆れたように呟いた。

「4万3000メートルの最大射程での砲撃は無理だったかしら？」
「各砲塔の個別測距儀しか使用出来ない状況ですからね。これ以上の精密射撃は無理でしょ。」
「そうね。射撃間隔も疎らだからね。」

ユリア司令官はそう言つと、司令官席に腰を下ろした。

「！？敵部隊転舵しました！！」

「転舵！？」

エリス艦長が見張り員の声に反応した。艦橋の上部は完全に瓦礫の山となつてゐる為、見張り員は艦橋に詰めていた。

「何を考えてこるのでしようか？」

「雷撃よ。」

砲術長の独り言に、コリア司令官が断言した。それにエリス艦長が尋ねた。

「！」の距離で雷撃ですか？」

「ええ、そうよ。エリスは戦艦の保有を自ら放棄したわ。戦艦と言う艦種の特徴は？」

「巨大な砲塔ですか？」

「そう。戦艦は敵よりも巨大な砲塔を装備するのが大事なの。その頂点が私達の乗つてゐるコナイテッドステージ級ね。」

戦闘中にも関わらず、艦橋はちょっとした授業が開かれた。主砲はこの間も攻撃を行われている。

「しかしエリスは空母しか保有していません。それなのに魚雷ですか？」

「そう。かつて我が國も超射程の魚雷を開発中だつたわね。」

「…………酸素魚雷ですか？」

「そう。最終的には複雑な方法が必要で、砲より時間が掛かるから開発は中止になつたわ。」

「！？それをエリスは開発した。」

「やう言つ事。」のユナイテッドステーツ級に負けない程の射程を有した魚雷がね。」

ココア司令官の言葉に、エリス艦長は見張り員に命令を下した。

「總員、田を凝らして酸素魚雷を発見するのよ！！」

日米英の砲撃戦は第2段階へと進んだ。

……すいません。

大英帝国海軍東洋艦隊旗艦戦艦プリンスオブウェールズ艦橋

「GF打撃部隊、転舵完了した模様です！！」

見張り員の声が伝声管から艦橋に伝えられた。

「長官、一体何をしているのでしょうか。」

「雷撃だよ。」

リーチ艦長の言葉にフィリップス長官は断言した。しかし艦橋スタッフの大部分は半信半疑の様であった。

「かつて我が国は純粹酸素を使った魚雷を開発していた。しかしそれには大きな危険を伴い、時間が掛かりすぎるとの理由で開発は中止となつた。設計図から試作品まで全て破棄し、『開発していた事実』まで無くしてしまつた。予算は戦艦開発関連に全て回される事となつた。さて、大日本帝國はどうだらうか？」

フィリップス長官は艦橋スタッフ全員の顔を見回した。講義が続く中でもプリンスオブウェールズ以下、東洋艦隊はその主砲の射程距離内に敵艦隊を收めるべく、進撃を続けていた。

「大日本帝國はワシントン海軍軍縮条約で戦艦建造を自主規制し、空母を海軍の主役と位置付けた。これにより大日本帝國は主砲開発に代わり、航空機開発や魚雷・爆弾・レーダー開発に重きが置かれた。その中の魚雷開発で当然ながら、酸素魚雷も開発候補に上がつ

ただろう。射程距離も長く破壊力も大きい酸素魚雷は戦艦を沈めるのに最適、と判断したのだろう。」

「しかし長官。それなら相手よりも強大な戦艦を建造・保有すれば良いのでは？」

砲術参謀が素朴な疑問を聞いた。その疑問にフィリップス長官は笑みを浮かべながら答えた。

「確かにそうだろう。諸君は東洋の『矛盾』と言つ言葉を知つてゐるか？」

フィリップス長官の言葉に艦橋スタッフは困惑の表情を浮かべた。疑問に疑問形で返された砲術参謀は特に、その筆頭であつた。

「矛盾とは中国の昔話とでも言おうか。昔中国のある村で、商人が村人相手に矛……槍の事だ……と盾を持ちながら説明をしていた。商人は矛を高々と掲げながらこう言つた。『この矛はあらゆる矛よりも強力で、貫けない盾は無い。』そして今度は盾を高々と掲げながらこう言つた。『この盾はあらゆる盾よりも強力で、防げない矛は無い。』商人は自慢気に言い切つた。そんな商人へある村人がこう言つた。『それじゃあその矛で盾を貫こうとしたらどうなるんだ？』商人は村人の言葉に答えられなかつた。」

「……」

フィリップス長官の言葉に艦橋は静まり返つた。何を言いたいのかが解らないみたいである。

「つまりだ、矛は強大な戦艦主砲で盾が強靭な戦艦装甲となる訳だ。」

「成る程。商人に言つたある村人のように世界各国が有する戦艦は、

矛と盾のようにお互いに強力になつて行つたんですね。」

リーチ艦長は領きながら納得している。他の者も漸く理解出来たらしく、『成る程』等と言つてゐる。

「さて、此れでGFの改変が解つただろう。」

「射程距離に入りました!!」

砲術長が艦内電話の受話器を耳から離しながらフイリップス長官・リーチ艦長に言つた。

「よし!!艦長、砲撃開始だ!!」

「了解、砲撃開始!!目標、敵巨大戦艦!!」

リーチ艦長の命令により、砲撃が始まった。

『トラック島沖で行われた一連の海戦の最終幕となつた砲雷撃戦は、結果から言えば日英海軍の勝利であつた。しかし、その勝利の代償は大きかつた。大英帝国海軍東洋艦隊旗艦プリンスオブウェールズの轟沈である。アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊旗艦ユナイテッドステーツの最後の咆哮が、見事に弾薬庫と機関室を直撃したのである。46センチと言う人類史上最大の主砲弾を4発も食らつたプリンスオブウェールズは、生存者無しと言う見事な轟沈となつたのである。彼女は大英帝国海軍の戦艦として生まれ祖国を護る為、遠く太平洋の地で熾烈な砲撃戦を行い、そしてその役目を終えたのである。彼女は見事に戦場で散つてみせたのだ。だが、その代償に見合つた結

果を大日本帝國と大英帝国は掴んだ。太平洋に於けるアメリカ合衆国海軍の影響力はこの海戦の結果、ほぼ皆無となり大日本帝國の影響力が飛躍的に増大した。この海戦に勝利したからこそ、亞細亞諸国は独立する事が出来、連合艦隊はその半数を大英帝国・イタリア支援の為に派遣出来たのである。もしこの海戦に大敗していたら……嫌、そのような事は考えないでいよう。歴史に「もし」は禁句である。』

小森菜子著

『帝國の聖戦回顧録』より抜粋

1942年1月26日午前5時

アメリカ合衆国首都ワシントンDCホワイトハウス

……時差がややこしいので、間違っていたら悪しからず。

大日本帝國と大英帝国との戦争が始まつてから、初の海戦が大敗北であつた事実は既に全米に駆け巡つた。戦艦7隻を含め59隻が撃沈されたのである。更に海軍が世界に誇る超弩級戦艦ユナイテッドステーツが、大日本帝國海軍に拿捕されるオマケまで付いていた。

オーバルオフィス

俗に大統領執務室と呼ばれるオーバルオフィスに、アメリカの政権中枢が集まつた。勿論、中部太平洋海戦（大日本帝國はトラック島沖海戦と命名）の大敗北について話し合われた。

「クイーン作戦部長。君には失望したよ。」

「……申し訳ありません。」

海軍作戦部長クイーン大将はそう答えると、再び頭を下げた。2メートルを超える長身である為、頭を下げる時、相手の座高と同じになる。それを不機嫌そうに見ている男性、アメリカ合衆国大統領ルーズベルトはそう言うと、陸軍参謀総長マーシャル大将に顔

を向けてた。

「クエゼリン島への守備隊派遣はどうなつた?」

「はい。1個中隊を派遣したいと思います。クイーン作戦部長、その点はお願ひします。」

マーシャル参謀総長はクイーン作戦部長に念を押した。

「それは何とも言えません。空母は海軍が保有する3隻全てが撃沈されました。巡洋艦・駆逐艦で護衛しますが、大日本帝國海軍の攻撃を防げるか……」

「最悪の事態を覚悟しなければならないのだな?」

クイーン作戦部長の言葉に、ルーズベルト大統領が溜め息を吐きながら言つた。

「それは困ります。1個中隊が孤立してしまいます。」

海兵隊総司令官ホルコム中将が慌てて言つた。

「或いは、もう孤立している。」

「そんな……」

ハル国務長官の言葉に、ホルコム総司令官は絶句した。

「諸君、我々は大日本帝國を過小評価し過ぎた。太平洋に於ける戦いは根本的に変えなければならない。クイーン作戦部長、君の意見を。」

ルーズベルト大統領に指名され、クイーン作戦部長はアタッシュケースから資料を取り出した。

「戦略の転換を決めました。まずは戦艦建造を中止し、空母増産を行います。それは巡洋戦艦エセックス級を空母に改造します。幸い1番艦と2番艦は上部構造物の建造前でしたので、早急に改造出来ます。更に正規空母の建造も行いたいと思います。」

「よかろう。財務長官、その点は大丈夫か？」

ルーズベルト大統領に言われ、ルミ財務長官は頷いた。

「大丈夫でしょう。国防費に回せるだけ、他を削ります。最終的には国債を買つてもらうか、増税を行います。」

「よし。クイーン作戦部長、金の心配は無い。」

ルミ財務長官の話を聞いたルーズベルト大統領は、クイーン作戦部長に言い切った。

「しかし問題があります。」

「何だね。」

ルーズベルト大統領は尋ねた。

「艦載機とパイロットです。艦載機は大日本帝國海軍の物より、2世代は遅れています。此れは絶望的です。今回の戦いで一方的に叩き落とされました。撃墜出来たのは戦艦や巡洋艦・駆逐艦の対空機銃です。艦載機の新型への更新が求められます。そしてパイロットの養成も行わなければなりません。空母の有効性を見せ付けられた以上、大日本帝國海軍に追いつかなければいけません。」

「なるほど。それは早急に行わなければならぬ。海軍長官、大至

急航空会社に新型機開発の連絡を。競争試作させ、開発と同時に量産ラインを準備する。今はとにかく時間が無い。」「了解いたしました。」

ノルン海軍長官はそう答えた。

「太平洋では全く敵に歯が立たないとは。予想外だ。中東戦線の状況はどうなった?」

「それは私が。」

スチムソン陸軍長官が言った。
新たな議題が発生した。

1月26日午前1時

オーストリア首都ウイーン公爵マンション

「あなた、コーヒー入りましたよ。」「ありがとうございました。」

男は女性にそう言われ、手を止めた。

「今度はどういう絵をお描きに?」

「テーマは第二次世界大戦だけど、平和を描こうとしてる。」

「そうですか。」

女性はせつ言つと、笑みを浮かべながら絵を見つめた。

「あなたの描く絵ですかね。世間は注目していますよ。」「騒がれるのは嫌い何だが……」

女性の言葉に、男は笑いながら答えた。

ピカソ・ダリと並び20世紀を代表する画家アドルフヒトラーは、この日も黙々と絵を描いていた。妻であるエヴァ・ブラウンに支えられ。

大英帝国の歓喜

同時刻

大英帝国帝都ロンドン

ルーズベルト大統領が大日本帝國への対応に頭を抱えている頃、大西洋を挟んだ大英帝国では歓喜の渦にあつた。同盟国大日本帝國と共に宿敵アメリカ合衆国太平洋艦隊を叩き潰したのである。しかも大日本帝國海軍連合艦隊は敵艦隊の旗艦ユナイテッドステーツまで鹵獲したのだ。まさに大勝利である。

しかしプリンスオブウェーラズが撃沈された事はさすがに秘匿された。大勝利を全面に押し出しての戦勝報道であつた。

首相官邸執務室

「我等が東洋の同盟国に賛辞を送らうではないか。」

チャーチル首相は久し振りに笑顔を見せた。何せ自分の国の軍は全て敗走していたのだ。第一次世界大戦勃発の原因となつたイラク侵攻では大英帝国は何の反撃も出来ずに敗退、フランスの侵攻に現地陸軍は壊滅した。

更にはオランダもフランスに加勢し、合同陸軍が中東を席卷。大英帝国の中東派遣軍は壊滅し、中東はフランス・オランダの手中となつた。大英帝国の残存軍はエジプトへ撤退し、アフリカ防衛に主眼を置くことを決定した。幸い地中海はイタリアが制海権を手中にしており、補給の心配は無かつた。フランス・オランダ連合陸軍は中東を支配下に置くと、北上しトルコへ侵攻。僅か2週間で占領した。

それからの動きは凄まじく、フランス・オランダは本国軍も総動員して歐州占領を画策し、実行に移した。動きは素早く永世中立国連合も例外では無く、イタリアを除く歐州はフランス・オランダの電撃作戦に占領されたのである。時に1941年12月の事であつた。亞細亞地方での大日本帝國の活躍とは裏腹に、歐州地方では大英帝国・イタリアは追い込まれていたのである。特にイタリアは北方が全て敵と言う事態に陥つた。ムッソリーニにしてもここが正念場と、大英帝国アフリカ植民地からの物資輸入を背景に陸軍兵力の増強を行つてはいる。フランス・オランダの戦車兵力は強大で現時点でイタリア陸軍が勝てる相手では無かつた。そこでイタリアは大英帝国に新型戦車の共同開発を提案。大英帝国も早急な新型戦車開発を行うべきだと開発を急いでいた為、その提案を二つ返事で受け入れた。大日本帝國も新型戦車の開発をしていたが、本格的な戦車戦をした事が無い為開発は遅延していた。それに新型航空機開発に主眼が置かれたのも更なる拍車をかけていた。

歐州では大英帝国・イタリアは苦戦していたのである。

「確かにプリンスオブウェーラズは沈んだが、太平洋における制海権は大日本帝國のものとなつた。そこで我が国は大日本帝國に対して援軍派遣を要請したいと思う。」

チャーチルはお気に入りの葉巻を噴かしながら、目の前に立つイーデン外務大臣に言った。

「如何でしょうか？いくら太平洋艦隊を叩き潰したとは言え、未だ太平洋艦隊には戦艦等の主力艦は多数生き残っています。如何な大日本帝國と言えども派遣してくれるでしょうか？」

「大丈夫だよ。大日本帝國海軍連合艦隊の半数と陸軍1個方面軍で

も送つてくれれば良いんだ。」

「そんな大軍をですか！？」

イーデン外務大臣は驚いた。海軍のみならず陸軍も派遣要請に加えると言つのである。確かに大軍だが、ひつくり返せばそれほど切羽詰まつてはいたのである。フランス・オランダ海軍は遂に地中海に侵入し、イタリアの制海権を奪取しようとしているのである。地中海の入り口ジブラルタルはフランス・オランダ海軍の艦砲射撃により壊滅し、もはやジブラルタルの防人は存在しなくなつた。もう一つの入り口であるスエズ運河は何とか大英帝国陸軍が死守していた。アメリカ合衆国海軍大西洋艦隊は今のところ動きは見られないが、何時地中海へ進撃してくるか分からぬ。その前に大日本帝國海軍連合艦隊を派遣してもらい、地中海の制海権を確固たるものにしようというのだ。

「心配いらない。彼等にはこの要請を受け入れるしかない。」

「何故ですか？」

「分からぬのかね。彼等は大東亜共栄圏なるものの設立を画策している。それを実現させる為、我が国は亜細亜植民地の独立を容認するんだよ。此れにはオーストラリアとニュージーランドも含んでだ。」

「そ、それは……」

イーデン外務大臣は再び驚いた。大英帝国の力の源である植民地を独立させると言つのである。まさに世界帝國の看板を降ろすと言つてゐるようなものだ。

「もちろん今すぐと言つわけにはいかない。戦後になるだろう。しかし大日本帝國の人種差別撤廃案に賛成した以上、植民地を保持し続けるのは祖国の威信に関わる。実利よりも名誉を我が国は手に入

れるのだ。もはや帝國主義も時代遅れだ。大日本帝國のようには併合による自國領化ならまだしも、我が国が行つてきたのは搾取隸属だ。聞くところによると大日本帝國は朝鮮半島や台灣のインフラ整備は当然の事、学校を建設し教育まで実施しているようだ。」「教育をですか！？」

「ああ。我が国とは根本的に考えが違う。どのような国と同盟を結べて良かつたよ。」「

チャーチル首相は本当に安心したよう言つた。

「確かにそのような仁義に勝る国と同盟を結べて良かつたです。」「当然だ。しかしこうしている間にもフランス・オランダ海軍は地中海で暴れようとしているし、植民地軍（アメリカ合衆国軍）は何時地中海に攻め入つて来るか分からん。早急に閣議で決定しなければならん。」「では閣議へ行きますか？」

「行こう。」

チャーチル首相はそう答えると席を立ち、イーデン外務大臣を連れ執務室を出ていった。

同時刻

地中海シチリア島沖150キロ

この海域を1個の艦隊が航行していた。名前は大英帝国海軍地中海艦隊。世界に冠たる大英帝国の方面艦隊である。規模は本国艦隊に次いで2番目の規模を誇る。現在地中海艦隊は地中海に於けるフランス・オランダ海軍の搜索を行つていた。

「提督、紅茶をどうぞ。」「ありがとうございます。」

提督はそう答えるとティーカップを受け取り、一口飲んだ。

「敵は出でくるかしら?」「はい。出できます。」

質問を受けた参謀長マリノス少将は司令長官ノワール中将に答えた。

「敵を早く見付けて、撃滅しないとエジプトに集結した陸軍が危ないわ。それにイタリアへの輸送路も遮断されてしまつ。」

「敵はまさにそれを狙つてているのでしょ?」

マリノス参謀長は言った。

「問題は敵がフランス・オランダの連合艦隊だと言つ事。こうなれば本家連合艦隊に助けて貰いたいわね。」

ノワール司令長官は笑いながら言った。大日本帝国海軍連合艦隊と大英帝国海軍東洋艦隊が太平洋でアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊を撃滅した事は、既に地中海艦隊に伝わっており空母艦隊の破壊力は新たな海軍戦略の一つとして知れ渡つた。しかし依然として地中海艦隊は空母は配備されていない純然たる打撃艦隊であり、空母は全て本国艦隊に配備されていた。だが敵フランス・オランダ海軍の艦隊も空母は配備されていないとの情報である為、会敵となれば大規模な艦隊決戦となるであろう。そして尚且つイタリア海軍も再び地中海の制海権を確固たるものにする為、艦隊を出撃させており地中海艦隊の後方30キロを航行していた。イタリア艦隊には空母が配

備されており、航空支援も一応は期待出来る。だがイタリア海軍の空母は搭載機が少なく、戦闘機の割合が高い艦隊防衛思想の為、大日本帝國海軍のような戦術や戦果は期待出来そうに無かつた。

「敵が出て来た時に勝てると思つ?」

「勝てると思います。」この艦は最新鋭戦艦です。確かに大日本帝國海軍のような航空攻撃を受ければ沈むかも知れません。現に大日本帝國海軍はアメリカ合衆国海軍の戦艦を航空攻撃だけで撃沈しました。しかし艦隊決戦なら敵を撃破するだけの砲撃能力を有しているので勝利する事は出来ます。」

マリノス参謀長はノワール司令長官の質問に答えた。大日本帝國海軍のもたらした大勝利は、世界各国の海軍関係者に驚きとショックを与えた。此迄は大日本帝國の空母建造に対する名田上の対抗で建造していた各国海軍は、その対抗で建造しただけの空母を見直して愕然とした。あまりにも実用的では無く、大日本帝國海軍の先進的な空母には足元にも及ばなかつた。

「確かにそうね。幸いフランス・オランダ海軍連合艦隊は空母を配備していないみたいだからね。問題はアメリカ合衆国海軍大西洋艦隊よ。それが地中海に出撃してくると厄介よ。軽空母を配備しているからね。早急に本国艦隊から空母を派遣してもらわないと。それにはまず……」

『一からレーダー室!…至急連絡致します!…左舷15度距離30キロ地点に敵艦隊発見!…』

「参謀長、どうやら艦隊決戦をしないといけないようよ。」

「もちろんです。」

マリノス参謀長は喜んだ声で返事した。ノワール司令長官は背筋を

伸ばすと、命令を下した。

「総戦闘態勢……全艦にもトロイー。」

地中海艦隊は艦隊決戦を迎えるとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036i/>

帝國連合艦隊～史上最大の空母艦隊出撃!!～

2011年9月17日17時14分発行